

講演要旨

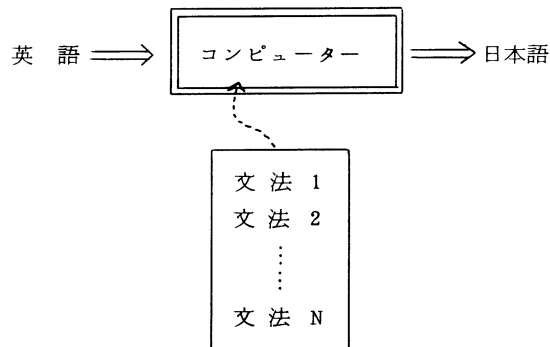
文法とコンピューター

福岡教育大学 本 田 漠

どの文法がすぐれているかということは、むずかしいけれど、興味をそそられることである。私たちの研究の最も大きな焦点はここにある。

結論までにはかなりの年月がかかるが、私たちの考えている仮定と方法はつぎのようなことである。

英・日自動翻訳に使える文法がいくつかある。それらをかりに文法 1、文法 2、……、文法 N とする。



これらの文法の中で最適の文法を決定する。そして、それを日本人のための英語教育に用いたいのである。つまりコンピューターを人工頭脳とみなしてのシミュレーションである。もしコンピューターにも理解できない文法であれば、英語教育に用いるのはやめよう。もしコンピューターに能率のよい文法であれば、英語教育にも能率のよい文法であるかもしれない。

いま関心のある文法は、ここに示しているものである。

文法 1 : Unidirectional categorial grammer (Ajdukiewicz: Poland)

文法 2 : Bidirectional categorial grammar (Bar-Hillel: Israel)

文法 3 : Associative bidirectional categorial grammar (Lambek: Canada)

文法 4 : Applicational grammar (Shaumjan: U. S. S. R.)

文法 5 : Dependency grammar (Hays: U. S. A.)

文法 6 : Transformational grammar (Harris: U. S. A.)

文法7: Generative grammar (Chomsky: U. S. A)

私たちは、いくつかの文法についての実験をするのであるが、つぎのような段階をふむ。

- (1) いくつかの文法を数学的に検討する。
- (2) それらの文法を FORTRAN 言語または FASP 言語で記述する。
- (3) それらをコンピューターにかけて実験し、最適の文法を決定する。

現在は、(1)の「数理言語学」の理論的研究を磯野隆之教授(数学)を中心とした6人のグループでおこなっている。(2)と(3)の実験的研究は藤川宣純氏(計算機室)と私の2人でおこなっている。